

二〇一九年度

一般公募推薦入学試験

【適性検査】

「国語」問題

1. 問題および解答用紙は試験開始の合図があるまで開かないでください。
2. 解答はすべて解答用紙の所定の欄に記入してください。
3. 受験番号および氏名は解答用紙の所定の欄に記入してください。
4. 試験終了後、解答用紙を問題の上にふせて置いてください。
5. 回収するのは解答用紙だけです。問題は持ち帰ってください。
6. 「国語」の問題は1ページから6ページまでです。

1 次の文章を読んで後の設問に答えなさい。

自分で自分の書いた日記を読み返し、そこに描かれている「私」の姿にとまどいや自己嫌悪を感じた経験はないだろうか。

描かれている「私」はたしかに自分であるはずなのだけれども、まるで別人のようにも感じられる。いつそ赤の他人ならよいのだろうが、一見異なる人物が実はほかならぬこの自分自身でもある、という二重感覚がわれわれをとまどわせ、羞恥や嫌悪の引き金になるのである。

いや、こうした言い方はあまり正確ではないかもしれない。たとえば写真で過去の自分の姿を見た時、われわれが感じるのは羞恥や嫌悪よりも、むしろ「こんな自分もいたのだ」というおかしみや懐かしさである。画像が外面的、形態的な客観性を保持しているのに対し、日記は言葉で書かれているために、本来外にさらされることのないはずの「内面」を露呈してしまっている。そのためにわれわれは勝手な「内面」づくりにいそしんでいた、まさにその行為にいたたまれなさを感じるのだ。

日記に登場する「私」は実にさまざまだ。友人と喧嘩したときの記述は自分が都合よく正当化されてしまっているかもしれないし、失恋したときの記述はこの世の悲劇を一身に背負ったヒーロー、あるいはヒロインになってしまっていることだろう。その時々的重要請に従ってフィクショナルに仮構された「内面」が、今、読み返している「私」と同一であることを強いられるがゆえに、われわれはいわく言いがたい羞恥と嫌悪を感じてしまうのである。

右の事情は、実は言語芸術である「文学」とは本来いかなるものなのか、という秘密を如実に解き明かしてくれているように思われる。

密室の芸術である小説は、人間が内奥に抱えている秘密をひそかにささやきかけてくれる。「ささやき」を行っているのは叙述に潜在している表現主体⁽³⁾のだが、この隠れた「私」は、秘密を臆面もなく暴露していることにもなう自負やらい、あるいは気恥ずかしさと向き合わなければならない。このひそかな葛藤⁽⁴⁾がどのように処理されているかが、実はその小説を読み解く重要な勘所^(A)の一つなのだ。いっそ、「私」など最初からないかのようにフィクショナルな客観世界を自立させ、淡々と報告していくやり過ぎ^(B)し方もあるのだろう。しかしどうにもごまかしがきかなくなってしまうのは、「私」が「私」自身の見聞や体験を直接の題材にしている場合である。この時「私」は「内面」づくりにいそしもうとする自分に否応なく向き合わされ、読者に対して「描く私」をいかにふるまってみせるかという、カコクな課題を突きつけられることになるのである。

初めて小説を書いてみようと思いついた時、多くの人はまず自分の体験を一人称の

「私」で素朴に綴ることから始めてみることにしよう。しかし実際に書き始めてみると予想以上に困難なことに気がつき、多くの場合、途中でペンを放り出してしまいうことになる。懸賞小説の応募作に多いのは中高年の人々が自身の体験談を素朴に綴った「自分史」であると聞いたことがあるが、実は「自分史」と「小説」とは似て非なるものなのだ。仕事の困難を克服した体験など、一つ一つは胸を打つ話柄ではあっても、実はそれ自体は「小説」ではなく、ノンフィクション等のジャンルでも充分に対応できるものなのである。それが「小説」になるかどうかはひとえに「描く私」のよそおいをどのようにつくっていくかにかかっている。体験を得々と自慢している姿が背後に透けて見えてしまうような論外だし、反省や自責の念一辺倒でも、自虐的な「良心」の押し売りとして反発を招くことになるだろう。「描く私」のみぶりはいわばそれ自体が一個のパフォーマンスなのであって、「描かれる私」をつくる主体として読者にいかに「私」を演出していくかという、その演技の舞台こそが小説空間なのである。

近代小説はこうした「描く私」の演技性に作者たちが気づき、時に大胆な失敗をくりかえしながらも果敢なチャレンジをくりかえしてきた歴史でもあった。

(安藤宏『私』をつくる 近代小説の試みより)

問1 —— 線部(A)・(B)の漢字はひらがなで読み方を示し、カタカナは漢字に改めなさい。

問2 —— 線部(1)「私」の姿にとまどいや自己嫌悪を感じ」とありますが、「自分」はどのような「私」に対して「とまどいや自己嫌悪を感じ」るのですか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 日記を読み返している「私」
- イ 別人のように描かれている「私」
- ウ 正確に「自分」を描けない「私」
- エ 画像のように形態的な「私」

問3

——線部(2)「いたたまれなさを感ずる」とありますが、日記に描かれた「私」をそのように感じるのなぜですか。理由として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 日記に描かれた「私」には、画像のように客観的には「自分」を描けないから立ちと、明瞭な自己像を描くことの困難さが内在しているから

イ 日記に描かれた「私」には、「自分」の「内面」が表れているばかりか、「私」をつくることに励んだ様子までもが読めてしまうから

ウ 日記に描かれた「私」には、羞恥や嫌悪が表れているだけでなく、それを隠したいという欲望までもが盛り込まれてしまっているから

エ 日記に描かれた「私」には、今の「自分」と比べて違和感があるのみならず、それを言葉によって説明するという制約もあるから

問4

——線部(3)「叙述に潜在している表現主体」とありますが、それはどのようなものですか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 客観世界を自立させ、淡々と報告するような「作者」

イ 誰もが内奥に抱えている、秘密を隠そうとする「人間」

ウ いわく言い難い、羞恥や嫌悪を感じてしまう「われわれ」

エ 秘密をささやきかける、本来は表に出てこないはずの「私」

問5

——線部(4)「ひそかな葛藤」とありますが、それについて次のように説明しました。空欄に本文中から適当な語句を補いなさい(句読点や「」などの記号も一字に数える)。

本来「内面」は外にはあらわれてこない。しかし、自分を「私」として描く「文学」においては、秘められていた「内面」が表にあらわれる。すなわち「ひそかな葛藤」とは、自分の「内面」を開く際に生ずる、

I (二字)

II (三字)

III (六字)

などの感情を、「私」としてどのように読者に対して見せるかという

IV (七字)

の作業のことなのである。

問6 ———線部(5)「描く私」の演技性」の説明として最も適当なものを次の中から選

び、記号で答えなさい。

ア 近代の小説空間においては、「描く私」のみぶりこそが「描かれる私」を演出してきた、ということ

イ 言語芸術である「文学」においては、「描かれる私」がいなければ「描く私」も存在しなかった、ということ

ウ 言語芸術である「文学」においては、「描かれる私」は「描く私」によって顕在化してきた、ということ

エ 近代の小説空間においては、「描く私」のよそおいが「描かれる私」の実体を隠してきた、ということ

問7 本文の内容と合致するものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 日記に描かれた言葉による「私」と、写真に残された画像の「私」とは、相容れないものである。

イ 文学とりわけ小説は、言語芸術であるがゆえに読者の想像力を喚起するところが大きい。

ウ 密室の芸術である小説は、「内面」に隠された秘密を暴露しようとする作者の決意にこそ価値がある。

エ 近代小説は「私」をつくる作者の試行錯誤によってつくられてきた。

2

次の文章は『近世畸人伝』の一節です。本文を読んで後の設問に答えなさい。

乞食こつじきの老婆、三条室町街にて絹※1の袷紗あじやに包みたるを拾ひて、その前なる商家によりて、(a)「尋ぬる人あるべければかへし給はれ」といふ。商家事ことしげ繁しげきよしをいひてうけがはざりしかば、(b)「情け無の人や、おとせる人のうれへを思ひ給へ」と誠まことめしに、⁽¹⁾恥ぢてあづかり、またその名をも問ひしかば、(c)「宇谷の亀」といへり。さてしばしありて、物を尋ぬるさまなるものを見つけて、問ひ正して与へしに、大いよろこびて、これが報ひに米銭などを持ち来たり、(d)「かの老婆来ることあらばおくり給はれ」と託す。果たして又来て、(e)「いかに^Bおとしたる人は知れたりや」と問ふ。しかしかのよしを告げて、かの報ひの物を与へしかば、笑ひて、(f)「これを受くるほどならば、かの物を売りて銭を得侍らまし」といひ捨て帰れりとぞ。

※1 袷紗……小型の風呂敷

※2 うけがはざりしかば……引き受けなかったので

問1 「」(a)～(f)の会話文の中から発言した人物が異なるものを一つ選び、記号で答えなさい。

問2 〓線部A「おとせる人」、〓線部B「おとしたる人」は同じ人物を表しています。その人物を示している他の表現を本文から十字以上十五字以内で抜き出しなさい。

問3 〓線部(1)「恥ぢて」とありますが、だれが何を恥ずかしく思ったのですか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 自分から名乗ることもせずにしたことを、老婆が恥ずかしく思った。
- イ 忙しさを理由に老婆の依頼を断ったことを、商家が恥ずかしく思った。
- ウ 準備したお礼の品が粗末だったことを、落とし主が恥ずかしく思った。
- エ お礼の品ほしさに善行をひけらかしたことを、老婆が恥ずかしく思った。
- オ 老婆の貧しい姿を理由にまともに取り合わなかったことを、商家が恥ずかしく思った。

問4 本文から読み取れることとして最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 報酬などあてにしていない老婆の無欲な潔さ
- イ 受けた恩義に返礼を忘れない落とし主の律儀さ
- ウ どのような身分の人も公平に扱う商家の誠実さ
- エ いつでも客のことを第一に考える商家の真面目さ
- オ どんなときでも笑っていようとふるまう老婆の健気さ

(以下余白)

